二〇二四年度　自己推薦入試　試験問題

文学部　フランス語フランス文学科

小論文

注意事項

一．試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。

二．試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。

三．解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。

四．試験時間は、九時三〇分から十時三〇分までである。

五．試験終了後、答案を回収する。問題冊子は持ち帰ること。

白百合女子大学

以下の文章は、ある文化人類学者が「異文化理解」について論じた書物からの抜粋です。これを読んで「異文化理解」と「情報」についての著者の考えを三〇〇字程度でまとめた上で、著者の考えに対するあなたの意見を五〇〇字程度で述べなさい。（計八〇〇字程度）

情報化社会と盛んにいわれていますが、私たちが注意をしなければならないのは、情報には二つのタイプがあるということです。それは「速い情報」と「遅い情報」です。情報と異文化理解というのは意外と難しい関係にあるのです。つまり、異文化については常に情報は流れると仮にしたところで、ほとんどの場合、それは速い情報として流れます。特にテレビを中心としたマス・メディアの世界では、アメリカといえば国際的な政治問題が起きるとホワイトハウスがぱっと映されますし、経済となるとマンハッタンの街をゆく人たちといった風景、中国では政治だと天安門、経済だと上海の賑わいなどが情報として流される。しかし、そこで実際どういう政治が行われ、経済が動いているのかとなると、速い情報だけではどうにもなりません。マス・メディア時代に私たちが日常の中で情報として受け取っているのはほとんどが速い情報なのです。実は異文化理解、特に異文化とのコミュニケーションをはかる場合には、遅い情報に注意を向けなければならないと思うのです。

どうして遅い情報かといいますと、先ほど述べたように、それが象徴的なレベルの現象とからみ合って、一見したところでは、その情報の意味がはっきりわからないことが多いからです。即断的に理解できる情報と、その情報の意味を理解するのに非常に時間がかかる情報とが存在するということです。情報を運ぶ手段は非常に速くなりましたけれども、その情報が理解される時間には依然として長くかかるものがあるのです。

プルーストの『失われた時を求めて』という有名な小説がありますが、最近、新たに翻訳されたものを読んでいて非常にわかりやすいと感じました。一九世紀から二〇世紀の初めにかけてのフランスの上流社会のことを書いたもので、これまでにもいくつか翻訳書は出版されているのですが、私自身今回の翻訳で初めてその世界に入ってゆけると思いました。それは翻訳文が大変わかりやすいということもありますが、同時にいまやフランス文化に対する全体的な情報が豊富になったからです。日本がフランスと接触して一〇〇年以上になるわけですが、フランスのいろいろな情報が日本の中に氾濫してきて、

異文化としてのフランス文化を理解する土台がある程度整備されてきたからだと思うのです。いろいろな情報の蓄積、あの小説の舞台となったパリやフランスの地方へも気軽に旅行ができるようになったこと、それにテレビなどのメディアがフランス社会と自然のさまざまな面についても日常的に伝えているということがあります。ようやく一般の日本人にとっても文化のメッセージとしてプルーストの小説の背景が伝わる形になったのではないかと思うのです。あの小説は一九二〇年代に完結した（一九二七年最終巻出版）わけですから、約七〇年かかってようやく日本人一般に理解される情報となって現れたといってもよいでしょう。時代小説の人気作家であった故池波正太郎は五〇歳をすぎてから初めてフランスへ出かけて、フランスについてのすばらしいエッセイを遺されていますが、若いときから親しんだフランス映画でフランス文化と社会のことを知っていたので、実際にパリに行ったとき少しも違和感がなかったと書いています。異文化理解のためのいろいろな蓄積があって初めて理解できるようなるという例ではないでしょうか。

つまり、異文化理解に対しては、拙速ということがいちばん良くないということです。遅い情報として受け取るべきものを、現代の人間は速い情報として受け取ってしまう。そこに誤解が生じます。

（青木保『異文化理解』より　引用者によって一部編集）